

2006年9月24日 聖霊降臨節第17主日礼拝

『この希望に生きる』

(ダニエル 12 章 1 ~ 2、使徒 24 章 10 ~ 23)

いよいよパウロの裁判が始まりました。先にはエルサレムの都で、ユダヤの最高議会の取り調べを受けたパウロでしたが。その後、千人隊長の機転により、カイサリアの町に送られたパウロは、ここで総督フェリクスの行なう裁判にかけられたのです。それは、パウロが法律に触れるような悪事を行なったからではありません。パウロ自身が述べているように、「死者の復活のことで、...裁判にかけられている」のです(21 節)。つまりパウロは、かつてイエス・キリストがそうであったように、無実の罪で裁判にかけられているのです。

かつてキリストは、弟子たちに、終りの日の心構えとして、このように話されました。「これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張られて行く。それはあなたがたにとって証しをする機会となる。だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」(ルカ 21 章 12 ~ 15)

パウロは今、かつて主イエスが仰られた試練に直面しています。そして、主が命じられた通りに、試練に立ち向かっています。パウロを訴えたユダヤ人たちは、プロの弁護士をやとってパウロをあれこれ訴えました。しかしパウロは、神様だけを頼りに、一人裁きの座に立っています。これが福音を証しするよい機会となることを信じて。ここでのパウロは、自分の無実を訴えるにとどまりません。「この道」、すなわちイエス・キリストを救い主と信じることのすばらしさを、人々に説いています。

さて、このパウロの弁明の中で、注目に値いする言葉がみられます。その一つが、17 節に出てくる「同胞への救援金」です。これは前にも少し、お話ししました。パウロがギリシア地方で伝道していたときのことで、エルサレムの教会が貧しさで困窮していることが、伝わってきました。そこでパウロは、自分が伝道し、あるいは建設した教会の人びとに呼びかけました。イエス・キリストの福音は、エルサレムの教会から発信され、わたしたちに伝えられました。ついては、困っているエルサレム教会のために、献金をささげてくださいませんか。わたしが責任をもって、献金をエルサレムの兄弟たち、使徒たちに届けますから。こう言ってパウロは率先して、エルサレム教会のために募金を行ないました。それを届けにやってきて、パウロは、迫害にあい、囚われの身となったのです。

今の今までパウロは、この募金・救援金のことを、なぜか一切口にしませんでした。キリスト教に反対するユダヤ人たち、その人たちの訴えを封じ込めるには、これほどよい材料はないはずですが。にもかかわらずパウロは、ここで初めて、ユダヤ人キリスト者への救援募金のことを口にします。しかもかなり控えめに。そしてこの後、パウロはこのことを全く口にしなくなります。なぜでしょう？

主イエスの教えに、こういう言葉があります。「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたがたの施しを一目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父(=神)が、あなたに報いてくださる」(マタイ5章3)。よいことをしたら、人に自慢したくなる。自慢とまではいわなくとも、人にも知らせて、みんなよいことをしましよと勧めたくなる。それが人情です。しかしイエスは、反対のことをおっしゃいました。隠れたところで、天に宝を積むことを勧められたのです。よいことをして人にほめられたなら、その報いはすでにこの地上で受けてしまっている。天での報いは残されていない。むしろ、地上で主イエスの名のために迫害され、耐え忍ぶとき、あなたがたは幸いである。天では大きな報いがある。右手のしていることを、左手に知らせるな。パウロは、このイエスのお言葉に従って、生きてきたのでしょ。ですから裁きの座で、たとえ自分に有利になるとわかっていても、わたしはこんなによいことをしました。だから無実ですと言うことはしたくない。それらは皆、天の神様が見ておられる。裁きそのものも、神様ご覧になっておられる。そしてわたしを訴える人びとと、わたしとの間を、神様が正しく裁いてくださる。神への信頼が、パウロの生き様すべてを支配していたのです。

ちなみに、このエルサレム教会への救援金は、約束通り、エルサレムの兄弟姉妹に届けられました。ユダヤのクリスチャンたちは、この献金にどれほど助けられたことでしょうか。この事実が、パウロとキリストの真実を証ししています。この救援金は、愛のわざとして始められました。異邦人のクリスチャンたちが、パウロの呼びかけに応じて、エルサレムの教会に救援金を送ったのです。異邦人とは、ユダヤ人から見て外国人のことです。ご承知のように、この時代、ユダヤ人は外国人を敬遠していました。真の神を知らず、聖書も知らない、汚れた民だといって、軽蔑すらしていたのです。これでは外国の人びとが、ユダヤ人のことをよく思うわけがありません。ですからこの時代、異邦人がユダヤ人に助けの手を差し伸べるなど、まずありえないことだったのです。異邦人に助けをもらうなど、ユダヤ人のプライドが許さない。異邦人の方でも援助するのはいやだ、というわけです。ところが、教会の中では、両者の間に愛の交わりが生まれていました。外国人とユダヤ人との不幸な垣根は、キリストの教会において、乗り越えられようとしていました。イエス・キリストを信じるという一点で。これは驚くべきことでした。同じユダヤ人同士でありながら、信仰上の理由で、大勢のユダヤ教ユダヤ人がパウロを訴えていたのとは、大いに対照的です。この意味で、み言葉に忠実であったのは、パウロ一人ではありませんでした。パウロによって神の言葉を伝えられ、キリストを信じるようになった人びとも、神を敬い、人を愛することに熱心でした。み言葉に養われていくなかで、教会の中に、愛と一致の心が芽生えていったのです。

さて、パウロが口にした弁明の中で、見逃すことのできない言葉がもう一つあります。15節です。自分を弁護するのに口の重かったパウロが、何度となく口にした言葉、それが「復活の望み」でした。14節から見てみましょう。「わたしは彼らが『分派』と呼んでいるこの

道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に即したこと、預言者の書に書いてあることをことごとく信じています。更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。」

死んだ人は必ず復活する。この希望は、古くから旧約聖書の中で、預言者たちにより語られていました。特にダニエル書に描かれた預言は、最後の希望といってもよいほどでした。しかしユダヤの人びとの間では、本当に復活などあるのか？ 信じる人と疑う人びとに分れて、長年、論争が巻き起こされてもいました。その答えを出してくださったのが、イエス・キリストです。キリストはわたしたちの罪を代わりに背負って、死んでくださいました。わたしたちを、神の命に活かすためです。このイエスが、死人のうちからよみがえられました。わたしたちが十字架につけて殺したあのイエスが、罪と死を滅ぼして、わたしたちの救い主となられたのです。

十字架の上で苦しみ抜いたあの方が、わたしたちの救い主であられる。これは、われわれに特別な意味をもっています。

人生で味わう悩み、できるなら避けて通りたい苦しみ。しかしイエス・キリストを救い主として仰ぐときに、それらは大きな意味を持ち始めます。キリストがわたしの苦しみをその身に引き受けてくださり、わたしと共に苦しんでくださったことを知らされます。わたしたちが人生で味わう苦しみは、すべてこの御方に出会うためにあったのです。この御方と一つに結ばれるため、そしてわたしたちの心が、滅び行くこの世から解き放たれて、キリストがおられる天にこそ、わたしたちの本当の居場所があることを、わたしたちは知るのでした。

これこそ、復活の希望です。「正しい者も正しくない者もやがて復活する」。この希望は、世の終りに最後の審判が訪れることを、わたしたちに思い出させてくれます。キリストは、生きている者と死んだ者とを審くために、再びこの世にやって来られます。この御方のなさる審判は、罪ある者にとって恐ろしい裁きです。神様はわたしたちの行ないもや心の中すべてをご存じです。一体誰が神の裁きから逃れることができるでしょう。自分の正しさだけでは、だれもこの審判をくぐり抜けることはできません。実際、わたしたちは皆、生まれながらの罪人、よいこともするけれども、悪いこともたくさんしてきました。しかし感謝すべきことに、わたしたちには、この審判をくぐり抜ける道が、たった一つ残されています。それは、歴史上ただ一人のただしい方、イエス・キリストのもとに身を寄せることです。この方を頼り、この方を信じて受け入れるのです。そうするならあなたもまた、キリストによって罪を赦されます。キリストを受け入れた瞬間から、神の裁きはわたしたちから離れ、神の愛を一身に受ける神の子として、生まれ変わることができます。幸いである。主によって罪を赦され、罪を覆っていただいた者は幸いです。

更に罪が赦されると、朽ち行くこの体に、永遠の命がキリストから与えられます。罪の赦しと永遠の命という救いを受けるために、わたしたちクリスチャンは、キリスト信じて洗礼を受けたのです。この約束は、決して違えられることはありません。

こうしてパウロが行なった弁明は、キリストを証しする言葉となりました。いわれない罪を着せられたならば、自分は悪くない、誤解だ、無実の証拠を、片っ端からあげていきましょう。もちろんパウロも、無駄に命を散らすことは本意ではありませんから、そうしました。自分に対する訴えがいかにかに事実反するか、一つ一つ例を挙げて反論しました。にもかかわらず、パウロが行なった弁明は、圧倒的に、イエス・キリストをほめたたえる言葉でした。キリストこそ救いである。復活の希望、永遠の命がここにある。キリストにはある。キリストのオンパレードでした。キリストがよみがえり、今も生きて、パウロと共におられる。そうでなければ、どうして、ここまで信仰を貫けるのでしょうか。

イエス・キリストは、弟子たちにこう約束されました。「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなる。忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」(ルカ 21 章 17~19)

このみ言葉を頼りに、パウロは誰一人味方のいないところで、最後まで信仰を貫き通しました。それは、決して孤独な戦いではなかったはず。なぜなら、イエス・キリストこそ、永遠に、わたしたちの味方だからです。主が、わたしたちと共に戦い、終りの日、わたしたちに勝利を与えてくださいます。この希望に生きる、わたしたちです。

[説教者：堀地正弘牧師]